

位置と環境

本遺跡は、西之表市の西南部、住吉の西海岸に位置している。標高17mの砂丘で、西南方の海側へ傾斜し、大町川の作った低地へ急な崖をなして臨んでいる。

調査の経緯

昭和45年10月の集中豪雨による崖崩れで、貝層が露出し、土器、獣骨、石器類が地表に流出したため、西之表市教育委員会が調査主体となり、昭和47年3月に発掘調査を実施した。

遺構と遺物

弥生時代後期から古墳時代にかけての貝塚と見られ、鉄製釣針や貝製品、獣骨、石器、土器などが出土している。

土器は、釣鐘形で脚台をもつ甕形土器で、文様は鋭いヘラを使って直線と曲線を組み合わせた特色あるもので、上能野式土器と呼ばれることになった。

貝製品は、貝輪、貝符、錘飾などが出土している。

鉄製釣針は現存の長さ約5cmであるが、頭部が欠失している。

貝塚周辺には埋葬が行われていたことが、発掘調査以前の県道工事等によって判明している。貝輪をつけた人骨をはじめ、計12本以上が発見されており、埋葬遺跡が東海岸に多く見られる中で、数少ない西海岸の埋葬例である。

特徴

本遺跡は、貝塚を中心として周辺に埋葬跡を有す



第1図 上能野貝塚の位置



写真2 上能野式土器



写真3 鉄製釣針

るもので、生活地域とこれを囲むような形の埋葬地域から形成された特色ある遺跡であるといえる。

また、この時期の鉄製釣針は他地域に出土例が少なく、製鉄技術や鉄の流通を考える上で、重要な資料であると思われる。

資料の所在

出土遺物は、種子島開発総合センターに展示・保管されている。

参考文献

西之表市教育委員会1972「上能野貝塚発掘概報」西之表市埋蔵文化財発掘調査報告(2)

(沖田純一郎)

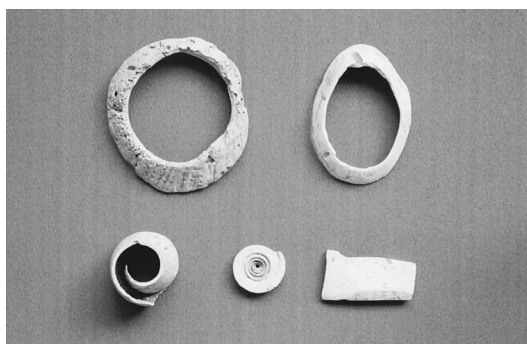


写真1 出土した貝製品